

Kyoto Art Center Collection 1

TSUGUKOTO - TSUTAERUKOTO

First edition published on August 23, 2014

Publisher: Kyoto Art Center

Yamabushiyama-cho 546-2, Nakagyo-ku, Kyoto, 6048156, Japan

TEL. +81-(0)75-215-1000 FAX. +81-(0)75-213-1004

<http://www.kac.or.jp/>

Distributor: MATSUMOTOKOBO Ltd.

Gajoen Heights (room) 1010, 12-11 Amijima-cho, Miyakojima-ku, Osaka, 5340026, Japan

TEL. +81-(0)6-6356-7701 FAX. +81-(0)6-6356-7702

<http://matsumotokobo.com>

Editors: Hagihara Reiko, Makita Ban

Book Design and DTP: Matsumoto Hisaki (MATSUMOTOKOBO Ltd.)

Printing and Bookbinding: Toshio Printing Company, Limited

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any forms or by any means  
without the prior permission of the publisher or author.

©Kyoto Art Center 2014

Printed in Japan

ISBN978-4-944055-70-8

Supported by

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

CONTRIBUTION

Kyoto Art Center Collection 1

## 「継ぐこと」と「償い」

稲賀繁美

*Hisami Inagaki*

伝統の喪失から喪失の伝統へ

伝燈と遷宮と

『ミリンダ王の対話』と題する伝典がある。紀元前二世紀後半、アフガニスタン・インド北部を支配したギリシア人の王、グリーク朝の王メナンドロス一世と、比丘ナーガセーナ(那先)の問答を記録したものとされる。そこにはこんな一節も遺されている。燃え続ける炎があるが、その焔は昨日の焔と同じものだろうか。燃焼が続いているのだから、そこで費やされる燃料はすでに昨日のそれとは別だろう。だが燃焼という現象は昨日からの継続であって、そこにはなんら断絶はない。人間の営みも、数百年、数千年の単位での推移を数秒あるいは数分に凝縮して映しだせば、この焔の姿に良く似たものとなるだろう。鴨長明のあまりに有名な『方丈記』の冒頭には「行く川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず」とあった。そこにかつ浮かびかつ

消え行く泡沫が、我々ひとりひとりの、束の間の実存だろう。だが、その意識は点滅し消滅しようとも、川の流れという永劫は、個々の人間の尺度を遙かに越えて、地球上の水の循環系に従って、生々流転を繰り返す。伝統とは西洋語の tradition の訳とされるが、同音同義で伝燈とも綴られる。伝教大師・最澄が開祖となつた比叡山では、教えの焰を継ぐという意味で、こちらの伝燈が用いられる。担い手はひとつの世代から次の世代へと交替してゆくが、そこに担われる燈火は、聖火リレーのように、その輝きを脈々と継いで行く。神道でいえばどうだろう。伊勢神宮は今年（執筆時点、西暦二〇一三年）に遷宮を迎える。持統天皇の二年（六九〇年）に現在の遷宮にあたる最初の儀礼が執り行われた、と記録に見えるが、それ以来、金座と米座のふたつの場所を往還して、代々の社が交替で受け継がれた。もちろんその歴史のあいだには、二十年ごとの遷宮が途絶えた時期も何度か記録に残っている。さらに先代の建築様式を次代が忠実に引継いだといわれるものの、実際には様式にまったく変化がなかったわけではない。あたかも遺伝における突然変異や先祖返りにも似た特異な現象も、歴史の有為転変のなかで経験してきた。

それでもその千五百年に及ぶ推移を一瞬で見渡すことができたならば、どうだろう。周囲の世界の建築が、絶え間ない衰亡を繰り返すなかで、伊勢神宮の建築様式は、細部に微動は見せながらも、まるで二重螺旋の遺伝子が自己複製するのにも似て、その原初の手で失われた形態を今に至るまで引継ぎ、伝えてきた。いささか驚くべきほどの安定性といって語弊はあるまい。一九三〇年代に日本に滞在し、伊勢神宮に開眼したブルーノ・タウトは、伊勢神宮をアテネのバルテノンと比べてこう観察している。バルテノンが今や古代世界の遺跡であり廃墟に過ぎないのに比べて、伊勢神宮は、その生きた形態を維持している、と。

継ぐこと、伝えること

Kyoto Art Center Collection 1

ここで新陳代謝 metabolism という言葉を思い浮かべることができるだろう。二十年ごとの遷宮によって、建築を構成する木材は取り替えられる。物質的にはそこにはなんらの継続性もない。だが物質的継続性を犠牲にすることによって、理念としての形態は永世に更新されることとなる。プラトンが日本に来ることができたならば、あるいは伊勢に自分の哲学的直観の似姿を見出したのではないか。エイドス（かたち・理念）とヒュレー（物質・元来は木材に語源を持つ語彙）との合体という、この古代の哲学者が想定したモノゴトの成り立ちが、伊勢神宮の遷宮によって、可視な形の伝承として生きられているからである。

### 永劫回帰と遺産の刷新と

哲学者の九鬼周造は、冒頭に引いた「ミランダ王の問い」を使って、西欧の哲学者たちに、東洋の時間理念を説いたことがある。一九二八年、足掛け八年にわたる西欧滞在の最後の時期、ボンティニーでの哲学者の

いながしげみ 一 国際日本文化研究センター教授／総合研究大学院大学文化科学研究科科長

一九五七年、東京生まれ広島育ち。パリ第七大学新課程統一博士号。三重大学助教授を経て、現職。専攻は比較文学比較文化・文化交流史。主要な著書に『絵画の臨界』『絵画の黄昏』『絵画の東方』（以上、名古屋大学出版会）、主要な編著に『伝統工芸再考・京のうちそと』（思文閣出版）、『東洋意識・夢想と現実とのあいだ』（ミネルヴァ書房）。遊覧クローデル賞、サントリイ学芸賞、倫雅美術奨励賞、和辻文化賞など受賞。

集いでなされたフランス語での講演である。そこで九鬼はさらに話題を転じて、ギリシア神話にあるシジフォスの物語に言及する。巨人シジフォスは、神々から巨大な岩を山頂へと運び上げる任務を負わされている。だが苦勞して岩を頂上まで運びあげると、その岩は無情にも谷底へと転げ落ちてしまう。シジフォスは再び谷底に降りてその岩を運びあげねばならない。この無意味なる反復の運命に「呪い」を読み取るのが、西洋哲学の伝統だった。だが、九鬼はこの解釈に敢然として異を唱えた。

ときあたかも、一九二三年の関東大震災から何年と隔てていない時期のことである。欧州の友人たちから、また百年もすれば再び地震で破壊されることが分かっている東京に、なぜ日本人は飽きもせず、地下鉄網を張り巡らせようとするのか。そう九鬼は尋ねられたのだという。はたして地震は災厄であり、破壊は呪いなのだろうか。否そうではあるまい、再び希望をもって何度でも再開する意思、それは自由の証でこそあれ、運命論者の敗北主義とは無縁なのだ。そう九鬼は主張して、シジフォス神話のうちに、自由なる意思の尊厳を象徴する希望の火を見ようとした。実存主義で一世を風靡したアルベール・カミュが『シジフォスの神話』(一九四二年)を発表するのは、それから十四年後のこと。おそらくカミュは九鬼の仏語論文を読んで示唆を受けたのでは、とする推定が、複数の学者によって提起されている。

ここにニーチェの永劫回帰との類縁性を見る読者は少なくあるまい。永劫回帰の円環的時間は東洋に特徴的であり、それは直線の延長による進歩と発展を旗頭にする西洋近代の時間意識とは対照をなす。これは長らく主張されてきた、東西比較本質論の定番のひとつである。だが永劫回帰には、ひとつ有名な逆説が孕まれる。私は永劫回帰の結果であるという意識を持つならば、その意識内容という過剰に相当する部分だけ、

継ぐこと、伝えること

Kyoto Daigaku Collection 1

私は前世の私とは異なつた存在であることになる。となれば私はもはや前世の私の永劫回帰した姿だとはいえないことになる。意識の上乗せが自覚として露見してしまえば、永劫回帰は自己崩壊を遂げる。となれば反対に輪廻転生は、そうと知らない場合にしか成立しないこととなる。

ここに伝統の逆説を読み込むこともできるだろう。前例を忠実に継承したという意識を持つ主体は、その意識の分だけ、前例からは、皮肉にも否応なく逸脱してしまう。反対に忠実に継承したという意識のない主体には、もとより伝統を継ぐとか、忠実に伝えるといった意識も欠落するから、みずからの継承の忠実さの程度を測定する術もない。むしろ意識的に伝統を破壊しようとする意思を持つ反逆者のみが、伝統との距離を意識している限りにおいて、断絶という破壊的關係のうちに、しかと伝統を見据えていることになる。

こうして継ぎ・伝えることとは、継げないもの、伝え得ないものへの愛惜と裏表にあることが見えてくる。およそ後世に伝えうることは、たかだか伝えるべきことの残骸、継ぐべくしてそれに失敗した喪失の傷跡に他なるまい。物質的な遺蹟とは、その証拠だろう。かつての人類が英知を傾注したものの、もはや本来の利用価値を喪失した残滓を、我々は廃墟と呼ぶ。二十世紀が後世に残す廃墟は、かたや原爆ドームと、かたや雪隠詰めにされた原子力発電所の廃炉と、なのだろうか。そこにも我々はなおシジフォスの神話の希望を託すことができるのだろうか。

京都芸術センター

京都市、芸術家その他芸術に関する活動を行う者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して2000年4月に開設されました。多様な芸術に関する活動を支援し、芸術に関する情報を広く発信するとともに、芸術を通じた市民と芸術家等の交流を図ることを目的としています。



Kyoto Art Center

*Kyoto Art Center was established in April 2000 in a hope to promote arts in Kyoto in a comprehensive way by collaboration between the city of Kyoto, artists and other people related to art. The center aims at supporting various artistic activities, providing information about arts, and promoting communication between the citizens and artists through arts.*

<http://www.kac.or.jp/>

京都芸術センター叢書 一

継ぐこと・伝えること

2014年8月25日 初版発行

発行所——京都芸術センター

〒604-8156 京都市中京区室町通船場下る山伏山町5-6-2  
TEL.075-215-1000 FAX.075-213-1004  
<http://www.kac.or.jp/>

発売元——松本工房

〒534-0026 大阪府都島区綱島町12-11 雅梨園ハイツ1010号室  
TEL.06-6356-7701 FAX.06-6356-7702  
<http://matsumotokobo.com>

編集——萩原麗子・横田盤

表紙・組版——松本久木(松本工房)

印刷・製本——国書印刷株式会社

本誌掲載の写真・記事等の無断複製・転載・デジタル化を禁じます。  
乱丁・落丁等は送料発元責任にてお取替いたします。

© 京都芸術センター2014

Printed in Japan

ISBN978-4-94-055-70-3

助成——公益財団法人ポニーラ伝統文化振興財団